

1 次の文章を読み、設問に答えなさい。

※なお、本文中の引用部分は読みやすくなるように一部表現を変えています。

「新しい女」「モダンガール」「良妻賢母<sup>りょうさいけんぼ</sup>」——どうでしょう、ピンとくるでしょうか？ 実はこの三者、よく似ているところも、少しも似ていないところもある三姉妹みたいなもので、その歴史には日本の「近代」の一面が鮮やかに表れているのです。

まずは「新しい女」。1900年ころまでには西洋各地で活躍していた彼女たちは、自分の考えを持って主張し、自分の仕事を持って自立した女性、あるいはそうありたい女性であって、西洋近代社会の一面を象徴する存在でした。そんな彼女たちは、( 1 )には認められている権利や自由が( 2 )には認められていないことを問題とし、様々な分野で公正さを求める運動(フェミニズム運動)を進め、1920年代までには、西洋各地の女性たちに選挙権をもたらしめます。

日本にも1910年代になると「新しい女」と呼ばれる女性たちが現れます。平塚らいてうとその仲間たちはその代表です。彼女たちは女性グループ「青鞥社<sup>せいとう</sup>」を結成し文筆活動を通じて、男女間の不平等とそれをベースとするこれまでのあたりまえを変えようとしています。彼女たちは大いに注目され、新聞や雑誌でもしばしば特集されましたが、その論調をまとめるとこんな感じです。「日本は西洋に比べると極端な男性優位社会らしいから、女性にもある程度の自由や権利を与えるということもしかたないかもしれないが、妻が夫に尽くし従うという家族の道徳を壊すような身勝手な主張はいただけない」。

というわけで、「新しい女」は、注目されはしましたが、誰からも歓迎されるというわけにはいきません。非難とからかい。ときにはこんな場面でも悪い見本とされました。①1914年度沖縄県立高等女学校卒業式、県知事あいさつの一部です。「近ごろ新しい女と呼ばれているのは、ある種の変わり者のことであり、それは昔からいて、新しくもない。要するにおてんばのことです」。

古い考え方や習慣を乗り越えろ、近代的になるのだ——国民に対してこう語りかけたのは他ならぬ日本政府であり、ようやく登場した「新しい女」はまさに「近代的な女性」だったわけですが、でも彼女たちは「『日本社会』<sup>\*</sup>が求めるような近代的な女性」ではなかったというわけです。ちなみに、夏目漱石など有名作家の作品

にも「新しい女」らしき女性が登場しますが、その描写には、《日本社会》の「新しい女」イメージが反映されていました。<sup>\*</sup>物語の中の「新しい女」は、いつも( A )で、( B )を( C )のです。<sup>②</sup>

つづいて「モダンガール」。「新しい女」から約10年、1920年代に登場した「モダンガール」は、「新しい女」に続いたようにも見えますが、平塚らいてうはこんなことを言っています。「外見だけでなく新しい思想を持っているのが真のモダンガールだ」。これは「モダンガール」に対する批判ですよね。1920年代日本では、男性について「( 3 )法」が制定された一方で、それと引きかえのように治安維持法が制定されます。社会や政治について考えるきっかけにあふれた時代でした。らいてうも( 4 )たちとともに「新婦人協会」を設立するなど、フェミニズム運動を加速させていましたから、意識が低そうに見える「モダンガール」にいらついていたのかもしれない。

洋装でスカート、洋風メイク、短い髪に帽子、ヒールの靴、ときにタバコや酒、映画館やカフェに通い、自分の望む相手と恋をし、こういったいろいろに給料を使い都会生活を楽しむ仕事を持った若い女性——そんな「モダンガール」は、あこがれから<sup>けいべつ</sup>軽蔑までとにかく多くのまなざしを引き寄せます。しかし、メディアの意見の多くは批判的でした。要するに「あの若い女たちはけしからん！」という感じです。しかし「モダンガール」現象は批判をものとしなかったみたいです。そもそも「モダンガール」は時代に求められて登場した女性たちでもあったのです。どういうことでしょう。

1920年代、日本の少なくとも都市部は、「必要なモノ」だけではなく、「欲しいモノ」を売買する時代、「消費主義」の時代に入っていて、それは( 5 )大震災すら乗り越える力強さを備えていました。西洋近代社会にグッと近づいた時期と言えるでしょう。単に「衣服」ではなく「おしゃれな衣服」、単に「<sup>せっけん</sup>石鹸」ではなく「いい香りの石鹸」。ここで重要な役割を果たすのが広告です。<sup>③</sup>「( D )」は広告によって作り出すことができるからです。「あなたたちのためにこんなに素敵なモノが用意されていますよ、素敵になりたいですよね?」。急増した働く女性はまさにターゲットでした。街角のポスターや新聞・雑誌の記事やイラストが、こんなふうにささやきかけるわけです。つまり「モダンガール」は、その外見だけで

なく、消費主義社会に求められ、広告を通じて登場したという意味でもまさに「近代的女性」でした。でも彼女たちもやはり「《日本社会》<sup>\*</sup>が求めるような近代的女性」とはみなされなかったのです。ムダづかいで、派手で、男たちと遊び回って、まったくけしからん——。では、いったいどうすれば？　ということで登場するのが「良妻賢母」なのです。

いかにも古めかしい響きの「良妻賢母」ですが、それは「近代化のために女性の能力も活用したい」ということで、1900年ころから女子教育に導入された新たな女性像でした。そして「新しい女」や「モダンガール」が登場すると「良妻賢母」への期待は一気に高まるのです。

その家庭と役割はこんな感じです——夫は都市で働くサラリーマンや役人、それなりの学歴と収入という男性です。「良妻賢母」はそんな夫に尽くし、従います。もちろん家事はすべて受け持ち、家計を管理します。子どもの教育も「良妻賢母」の役割です。近代的な教育を受け、エリートまたは「良妻賢母」を目指すようにうながします。ご近所からは「いいおうち」と呼ばれるべき家庭ですから、夫や子ども、そして自身の身だしなみも大変重要です。こざっぱりしていて、品があって、ほどよく洋風ということになるでしょう。これももちろん「良妻賢母」の担当です。そして、すべては日本の近代化のためにあるのです。——さて、どうでしょう、例えば「新しい女」だったら、こんな「良妻賢母」に何かひとつと言いたくなる<sup>④</sup>のではないのでしょうか。いずれにしても「良妻賢母」には《日本社会》<sup>\*</sup>のこんな欲望が反映されているのです——さらなる近代化のためには女性の能力も活用したい、でも女性にはその能力を職場など公的空間ではなく、その能力のすべてを家庭、すなわち私的空間で出し切ってもらいたい。日本の近代化は、公的空間と私的空間を切り離し、同時に（ 6 ）を「公」に、（ 7 ）を「私」に結びつけながら進んでいったと言えそうです。

結局のところ、「新しい女」「モダンガール」「良妻賢母」は、いずれも近代化を目指す過程で求められた女性像にほかなりません。ぜんぜん似ていないように見えるモダンガールと（ 8 ）だって、消費主義という観点から見れば、よく似た姉妹なのでした。冒頭、この三者を、三姉妹のようだと言ったのを思い出してもらえればと思います。

問1 空らん( 1 )～( 8 )に当てはまる語句を語群ア)～チ)から選び、記号で答えなさい。ただし同じ語句を何回用いてもかまいません。

<語群>

ア) 女性      イ) 男性      ウ) 西洋人      エ) 東洋人      オ) 国民投票  
カ) 制限選挙      キ) 普通選挙      ク) 新島八重      ケ) 津田梅子      コ) 市川房枝  
サ) 樋口一葉      シ) 関東      ス) 東京      セ) 東北      ソ) 日本  
タ) 新しい女      チ) 良妻賢母

問2 下線部①について。10年後、この知事に同じ機会があったとしたら、そのとき彼は、卒業生たちにどんな言葉をかけるでしょうか。本文から推測して記しなさい。

問3 下線部②について。空らん( A )～( C )に当てはまる語句の組み合わせとして正しいものを、ア～エから選び、記号で答えなさい。

ア (A) 脇役      (B) 男性主人公      (C) 支える  
イ (A) 脇役      (B) 男性主人公      (C) 困惑させる  
ウ (A) 主役      (B) 脇役の女性たち      (C) 導く  
エ (A) 主役      (B) 脇役の男性たち      (C) 導く

問4 下線部③について。空らん( D )に適切な語句を当てはめなさい。ただし本文中の語句を用いること。

問5 下線部④について。「新しい女」だったら、「良妻賢母」にどんな言葉をかけるでしょうか。推測して記しなさい。

問6 下線部\*「《日本社会》」は、つまり、どのような社会と言うべきでしょうか。<sup>かんけつ</sup>簡潔に記しなさい。

問7 [図像]は、銀座三越デパートのオープンを告げる広告です(1930年)。そのターゲットはどんな人たちで、その人たちにどんなことを語りかけていると考えられるでしょうか。図像と本文を参考にして具体的に記しなさい。

[図像]

